

## 学 位 論 文 内 容 の 要 旨

学位申請者	<p style="text-align: center;">武田（六角） 洋子【博士】</p> <p style="text-align: center;">【人間発達科学専攻 平成12年度生】</p> <p style="text-align: center;">（平成18年3月31日 単位修得退学）</p>	要 旨
論文題目	<p style="text-align: center;">保育者と心理職の協働による親支援 ―親教育を主軸に据えた実践から―</p>	<p>本研究は、子育て支援における親教育プログラムを、保育者と心理職が協働して実践した事例をもとに、2つのリーサーチクエスチョンすなわち、</p> <p>①保育者と心理職の協働によりどのような親支援が可能となるのか</p> <p>②またその協働の体験は、両者にとってどのような意味をもたらすか</p> <p>について、具体的な実践を行いながら、6つの調査をもとに検討したものである。調査1～5までは、親教育プログラムの実践に参加した親、支援者の保育者及び心理職を対象とした調査である。調査6は、心理職との協働体験があまりない、保育所の保育者を対象とした調査であり、協働体験の違いによって、心理職をどのようにとらえるかを比較している。</p>
審査委員	<p style="text-align: center;">（主査） 准教授 青木 紀久代</p>	<p>本研究から得られた主要な知見と意義は、次の2点である。</p>
	<p style="text-align: center;">教授 浜口順子</p>	<p>第一は、生後3歳までの子育てを家庭で行う親たちに、親子教室を実践し、特に親の教育プログラムの効果を具体的に検証したことである。親が自ら子育てについて学ぶ体験を継続的に持つことは、親としての自己肯定感を高め、安定した子育てを可能とするのに効果があると共に、子育てに自信がなく、自己肯定感が低いために、心理的な援助を必要とする親に対しても、保育者と心理職が共に関わることで、一定の効果が見いだされた。こうしたことから、子育て中に起こる様々な問題に対する予防的な意義があると示唆された。</p>
	<p style="text-align: center;">准教授 伊藤 亜矢子</p>	<p>第二は、保育者と心理職が協働して、子育て支援を行う体験は、実際の子育て支援の実践が一つの専門性で行われる支援よりも豊かになるととらえていることを明らかにしたことである。例えば保育者は、心理職の専門性を学び、自らの保育の技量を向上させることができると認識していた。</p>
	<p style="text-align: center;">教授 小玉 亮子</p>	<p>一方、協働経験の少ない一般保育所の保育者は、心理職を保育者と対等な関係とはとらえず、自らのバーンアウトの救済者あるいは、指導者として依存的にとらえていることが見出された。</p>
	<p style="text-align: center;">准教授 刑部 育子</p>	<p>以上のことは、今後の子育て支援現場での保育者と心理職の対等な協働が可能であること、またそれによって、良質な支援が実現する可能性を、実践と調査の結果を踏まえて具体的に示したものと、評価された。</p>